

原発避難地域における
まちづくりと
場づくり
～双葉町と楢葉町での実践的研究活動から～



第94回福島復興学会
日時： 2026/01/14 (水) 16:00 –
場所： 都市防災研究所
報告： 福島大学特任准教授松下朋子

1. コンテクスト

- 原発避難12市町村の復興状況の概要
 - データからはみえにくい原発避難市町村の実態
- 原発避難地域におけるまちづくりの意義について
 - 非原発避難地域との違い、課題とその実態
 - 原発避難地域におけるまちづくりで何をすべきか、できるのか
 - 場 = 社会的インフラの重要性と場づくり

2. 双葉町と楢葉町での実践的研究活動の報告 :

- 双葉町での活動：
 - 地域活動拠点FUTAHOMEでの2つの場づくり：
 - Formalな交流の場として：HOMEあう会
 - Informalな交流の場として：「Tomo's bar 月曜から夜ふたば」
 - 空き地利活用：子供の遊び場・広場づくり
- 楢葉町での活動：
 - 空き家利活用：地域交流の場づくり「みんなのこーみんか」

3. まとめ

- 草の根から始まる境界を超えたまちづくりへ

町内居住率(2025.1)と帰還困難区域を除く避難解除の時期と帰還困難区域の割合

双葉町：3.4% 20.3.4, 22.8.30 96%

大熊町：13.6% 19.4.10, 20.3.5, 22.6.30 62%

富岡町：22.9% 17.4.1, 20.3.10, 23.4.1, 23.11.30 12%

浪江町：15.5% 17.3.31, 23.3.31 80%

飯館村：33.6% 17.3.31, 23.5.1, 25.3.3 5%

川俣町山木屋地区：52.8% 17.3.31

南相馬市小高区：61.3% 11.9.30, 16.7.12 6%

原町区：85.6%

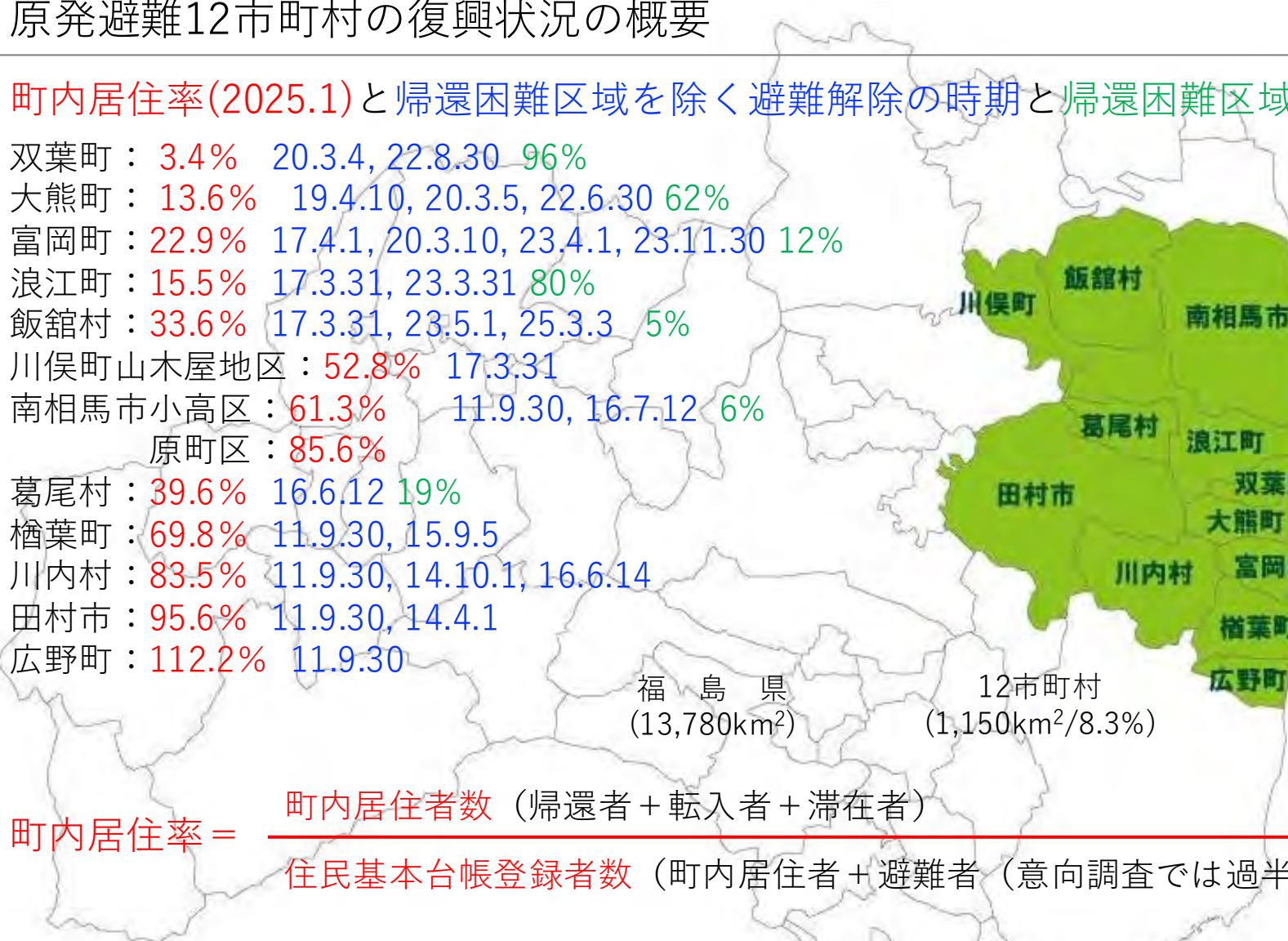
葛尾村：39.6% 16.6.12 19%

楢葉町：69.8% 11.9.30, 15.9.5

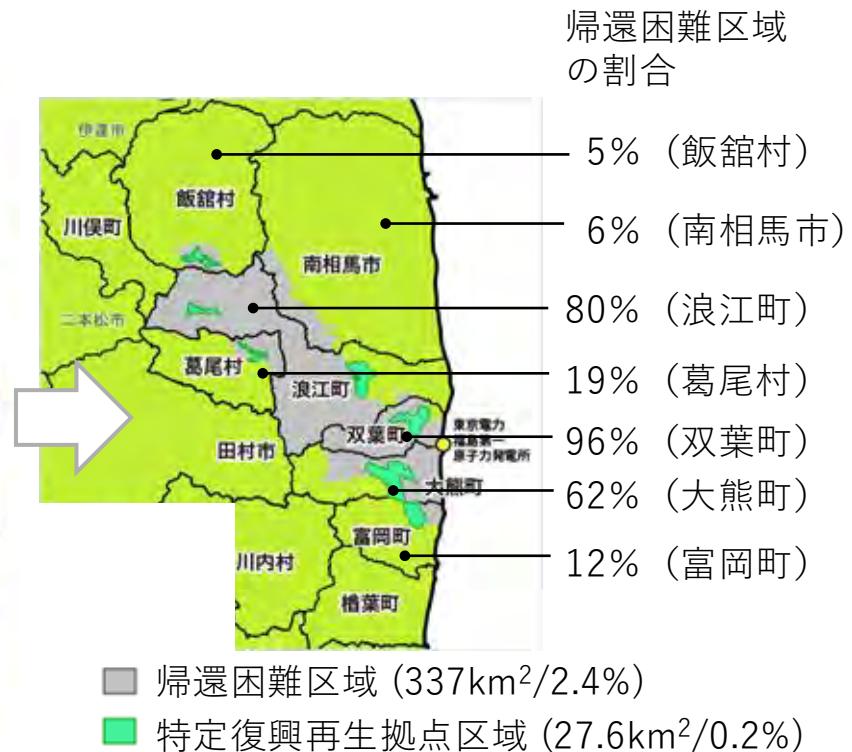
川内村：83.5% 11.9.30, 14.10.1, 16.6.14

田村市：95.6% 11.9.30, 14.4.1

広野町：112.2% 11.9.30



$$\text{町内居住率} = \frac{\text{町内居住者数 (帰還者 + 転入者 + 滞在者)}}{\text{住民基本台帳登録者数 (町内居住者 + 避難者 (意向調査では過半数が戻らないと回答))}}$$



- ✓ 約半数が戻らない住基人口をもとに出された居住率は、何を意味するのか
- ✓ 避難者数の数え方が国・県と自治体の間で異なる問題は、何を意味するのか
- ✓ 「戻りたいけど戻れない」人々の存在は可視化されにくい

2018年3月末に帰還困難区域を除く8県100市町村で**面的除染**が完了し、それに伴い避難指示も解除されたが、未だに7市町村では帰還できない土地、住民を抱えている。それらの一部は**特定復興再生拠点区域**に認定され2023年11月に全ての避難指示が解除され、**特定帰還居住区域**においては2029年12月31日が計画期間となっている。

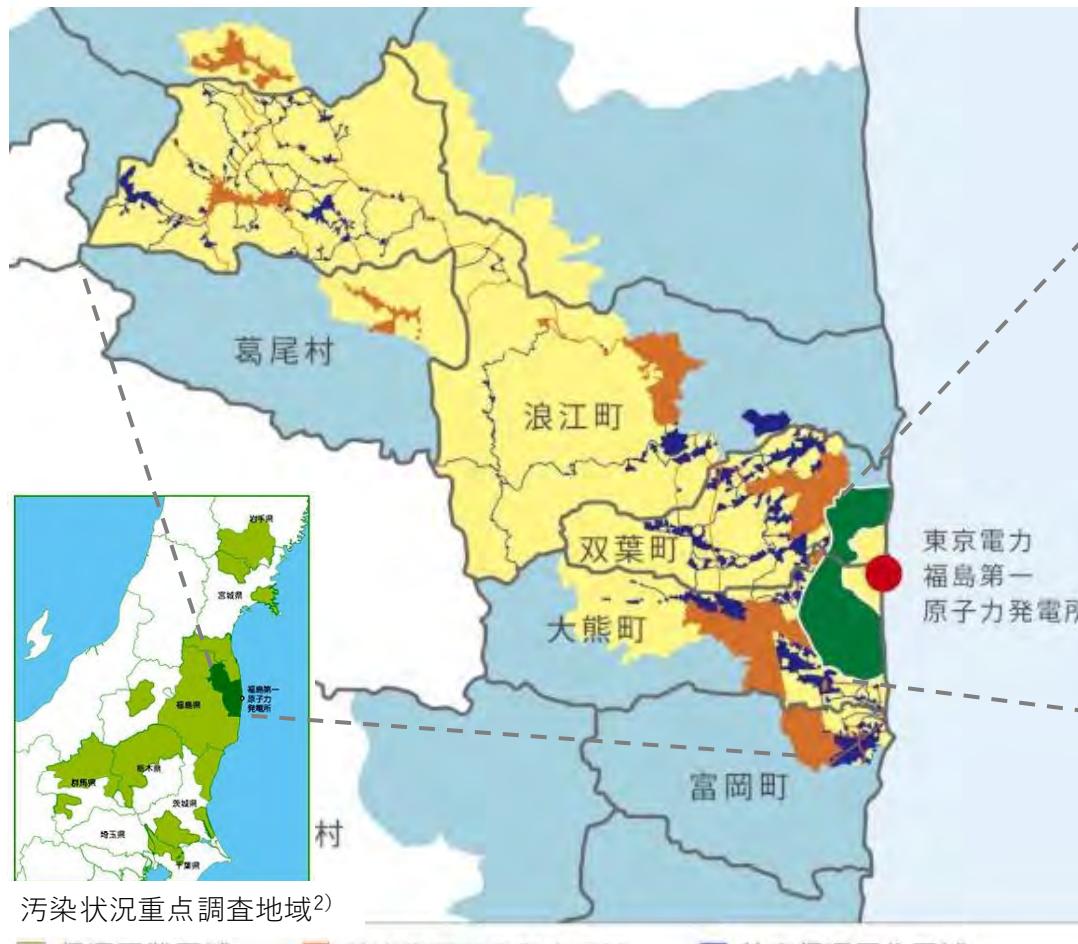


	帰還困難区域 (全町面積に占める割合)	特定復興再生拠点区域 (当該町の帰還困難区域に占める割合)
双葉町	49km ² (96%)	5.6km ² (11%)
大熊町	49km ² (62%)	8.6km ² (18%)
富岡町	8km ² (12%)	3.9km ² (49%)
浪江町	180km ² (80%)	6.6km ² (4%)
飯館村	11km ² (5%)	1.9km ² (17%)
南相馬市	24km ² (6%)	NA
葛尾村	16km ² (19%)	1km ² (6%)

1) **特定復興再生拠点区域**とは、**帰還困難区域**の一部において帰還意向のある住民が帰還できるよう必要な箇所の除染を進め、避難指示を解除し、住民の帰還・居住を可能とするエリア。**特定帰還居住区域**は、地元住民から拠点区域外にある自宅への帰還の強い要望を受け、2020年代をかけて拠点区域外に帰還意向のある住民が帰還できるよう、帰還に必要な箇所の除染を進めるという政府方針

2) 年間の追加被ばく線量が年間1ミリシーベルト（1時間あたり0.23マイクロシーベルトに相当）の地域を含む市町村が「汚染状況重点調査地域」に指定されている

帰還困難区域内の状況



汚染状況重点調査地域²⁾

- 帰還困難区域
- 特定復興再生拠点区域
- 特定帰還居住区域
- 除染特別地域(帰還困難区域外)
- 中間貯蔵施設

環境省 除染情報サイト <http://josen.env.go.jp/return/>

中間貯蔵施設



住民票を移さない、
住めない土地を耕す
という行為について

失われたものは何で、
大切にすべきものは
回復すべきなのは何なのか



- 戻るつもりがなくても、戻れないとわかっていても、住民票を移さない人がいる。**住めなくとも手入れをし続けている人がいる。**
 - ❖ 先祖代々住み継いできた家を解体し、残された広大な土地にもう住めないとわかっていても雑草を刈りに来る夫婦（浪江町津島地区）
 - ❖ 住民の約7割が戻ってきていないのに、村のあちこちに見られる手入れの行き届いた庭や道路脇の花壇（飯館村）
- 意向調査による「帰還を決めた理由」には「**気持ちが安らぐこと**」が最も多い
- 土地を耕す、手入れをする行為は、故郷を失った人々が時間をかけてその喪失による傷を癒すための大変な**作業、時間**であり、自らの将来について考え、判断するために必要な交流や情報交換の**場と機会**を提供している

住むことはできなくても故郷との関わりを持ち続けたい、という思い
に対して何ができるのか

飯館村にて、定期的な草刈りのために
避難先から住民が集まっている

復興拠点で起きていること

復興拠点を重点的に整備し、**帰還できるようにすること**によって、人口を増やし、町に活気を取り戻そうとしている。復興拠点の認定に伴って出された避難指示解除による固定資産税の免税も徐々に終了するため、残っていた**住宅の解体が加速度的に進んだ**¹⁾。

復興拠点の外で起きていること

300km²余りの帰還困難区域の今後については、明確な避難解除時期が示されていない。

避難指示の解除を前提とする全域除染とは異なり、**際(きわ)除染 (=幹線道路沿いの両側最大20m幅に限って対象内の家屋を解体、除染するという手法)**によって除染作業が進められ、**国費で家を解体する場合の期限²⁾**が示されている。

心の整理がつかないまま、経済的な理由で決断を迫られている

- 1) 避難指示の解除前は全額固定資産税等の免除対象だったが、復興拠点の認定に伴って出された避難指示が解除後3年以降は免除が受けられなくなる
- 2) 幹線道路から20m以上離れた人家については国費解体の対象から外れている



飯館村長泥地区の復興拠点では**除染土壤を農地造成に再利用する環境再生事業**が進められている。線量は事故前の3倍あるが、BBQが付設されたコミュニティセンターは誰のため？



国の補助金と東電の子会社が出資するバイオマス発電所。9万5千トンのバークを燃やして7500kw。汚染された木材を焼却すると容量は1/200だが線量が200倍に濃縮



復興拠点に建設された公営住宅。災害公営住宅30戸、再生賃貸住宅56戸の合計86戸の計画

復興のための大規模公共事業

復興公営住宅、医療・介護・教育・買い物環境の整備、除染土の処理や中間貯蔵施設の整備、道路や鉄道など**公共インフラの復旧**に加えて、企業立地支援¹⁾を受けて工場等が建設されている。メガソーラー、水素エネルギー、ロボットテストフィールドなど、**福島イノベーション・コースト構想²⁾**に基づく大規模な開発実証拠点の整備など数々のハード事業が進められている。

➤ これらの事業による**住民へのメリット**は何か？

風景の喪失



南相馬市小高区

長い避難期間のうちに、「戻りたい」と切望してきた故郷は面影もないほど変わり、その場所を介して在った地域コミュニティとのつながりや**生業**も同時に失われた。

雑草に覆われ朽ちていく家、新築の単身者用アパート、真新しい復興住宅団地が、それぞれ別世界のように存在している

見えないリスク



飯館村

宅地、農地、道路が優先的に除染され、森林は「生活圏」と定義された林縁部から20m以内の範囲に限り除染されている³⁾。除染対象である35市町村の全森林面積 (4,900km²) のうち除染された面積は2% (104km²)。山菜やきのこなど森の恵みを享受してきた村民にとって**山も人々の「生活圏」**なのに。

✓ 避難解除したから帰還できると言われても、放射線という見えないリスクに囲まれた環境でそれまでの暮らしをすることができるのか

1) ふくしま産業復興企業立地補助金、福島復興再生特別措置法による課税の特例

2) 福島復興再生特別措置法の改正（2017年5月19日公布・施行）

3) 除染は放射線防護の観点から定められているため

Build Back Better **TOGETHER** 自治体間での節約的連携または 広域連携の必要性



福島のために、
福島から世界に発信

- 復興予算の後ろ盾もあり、各自治体がそれぞれ**フルコースの復興**に向かっているように見える。避難指示解除の時期の違いによる差はあるが、解決しなければならない**課題は似ている**。人口減・高齢化が進む中、**箱物**はできても、今後それらを運営していく**人材や維持費**はどうなるのか？
- 第2期復興・創世期間（～25年度）の終了後を見据えて、節約精神、シェアリングエコノミー的に、お互い持ち寄る発想で連携することで、一自治体では難しいことも可能になっていくのではないか。
- 共同でやること**（自治体連携）**の課題をどう乗り越えるか**を議論する時ではないだろうか（誰が主体になるのか？誰が運営するのか？どこに作るのか？等）

- 都会への人材の排出、農産物・エネルギーの生産地だった福島が、原子力災害を経験したことで**世界的にも特別な意味を持つ場所**となった。
- 福島では小規模でも個人的な思いの強い、わくわくするような実験的でボトムアップな場づくり、仕事づくり、関係づくりの動きが起きている。それは**福島が新しいことにチャレンジできる場所**として認識されているということ
- エネルギー問題**が世界情勢を左右する昨今、今後の動向が注目されている中で「福島のための福島」になるために何をすべきか？という視点をもちながら「福島から」世界に発信することにも意味がある

まちづくり研究において
現地で研究活動をする意義

- 1. 暗黙知の獲得**：数値化されたデータには現れない、住民の町やコミュニティに対する思いや、場所が持つ歴史、歩いてみて初めてわかる身体的な距離感や雰囲気を把握する
- 2. 関係性の構築**：住民、行政をはじめ様々な関係者との、繰り返し行われるやりとりに基づく信頼関係の構築
- 3. アクションリサーチの実践**：参与観察的に実際に物事を動かして反応を研究する

非原発避難地域との違い、
課題

- 変化の激しい地域**：原子力災害被災地においては、家屋の解体、復興関連施設やインフラの建設など、日々刻々と風景が変わる
- 未解決な問題と隣り合わせ**：帰還困難区域や中間貯蔵施設のように、将来の見えない地域が存在する
- 複雑化したコミュニティ**：避難の長期化により、「住民」という一括りの言葉では捉えきれない立場の分断が生じている。町内に暮らす住民には帰還者、移住者、復興に関わる関係者など多様な層が混ざり合い、新旧住民という括り方が難しい
- 長期・広域避難による住民間のズレ**：長期的・広域的な分散が物理的に集まることを困難にし、当事者意識の希薄化、情報の非対称性からくるズレが生じている

原発避難地域におけるまちづくりで何をすべきか、何ができるのか

場を通じた人とのつながりと その回復のあり方について

災害時には、場（ここでは家、学校、職場、店、公共施設等を意味する）とのつながりを喪失し、それらの場を通じて存在していたあらゆる営み、人間関係、そして長期的には記憶など、多くのものが失われた状態に陥る。

社会的インフラ※の重要性

環境の変化がある程度やむを得ない状況の中で、「**場=社会的インフラへのアクセスが途切れることなく継続される**」ことが重要ではないかと考える。それにより避難生活に伴うストレスやそれに起因する問題の軽減につながると考える。

場をつくる「機会」を作ること

場をつくるという行為・作業は、目の前の問題を直接解決しない場合もあるが、間接的に、断絶によって生じる虚無感、孤独、不安など様々な感情と向き合うことを促す。「**場づくり**」の機会を作ることも重要であると考える。

全て一度に作り込まずに、 確かなものを手掛かりに、 できることから始める

卵が先か、鶏が先か、の状況においては、**そこにある可能性と意志**を見つけ、それを育てていくことは可能である。それが確実に何らかの結果をもたらすかはわからなくても、その**プロセスから生まれる関係性や経験は確かなもの**として残る。その**積み重ねがまちづくりの土台**となりうると考える。

注：Social Infrastructure（社会的インフラ）とはEric Klinenberg が”Palaces for the People: How Social Infrastructure Can Help Fight Inequality, Polarization, and the Decline of Civic Life”で定義する「人々の交流を生む物理的な場や組織、ソーシャルキャピタルが育まれるかどうかを決定づける物理的条件を満たすもの」のこと、「継続的・反復的な共同活動が行われる場所」で、極めて自然に存在するものであるため、それが失われた時に最もその存在を意識するような場所のことを指す。

なぜ双葉町と楢葉町か

福島国際研究教育機構 (F-REI) の第5分野（原子力災害に関するデータや知見の集積・発信/分野長東北大
学今村文彦、副分野長東京大学出口敦、同日本環境衛生センターアジア大気汚染研究センター大原利眞）委
託事業「福島浜通り地域におけるまちづくり研究及びラーニング・コミュニティハブ整備」「福島浜通り
地域における復興・再生まちづくり研究」（代表東北大学姥浦道生）のメンバーとして2024年9月**楢葉町に**
あるシェアハウスkashiwayaに入居、2025年2月から**双葉町のFUTAHOME**にて週5日勤務開始。



シェアハウスと食堂 kashiwaya
in 楢葉町 (2022.5改装オープン)



絵・写真: kashiwaya HPより

楢葉町

双葉町

避難指示解除

2011.9.30, 2015.9.5

2020.3.4, 2022.8.30

人口 (2011/2025)

8,011 / 6,411

7,140 / 5,279

町内居住率(2025.1)

69.8%

3.4%



改修前のFUTAHOME

常磐線で通勤
door to door 30分



地域活動拠点FUTAHOME (ふたほめ)
in 双葉町 (JR双葉駅東側にある既存の建物
(昭和43年築/木造2階建) を改修し
2025.2オープン) 運営: コトラボ合同会社



双葉駅東側の施設計画状況



2F:コワーキングスペース



1F:チャレンジショップ

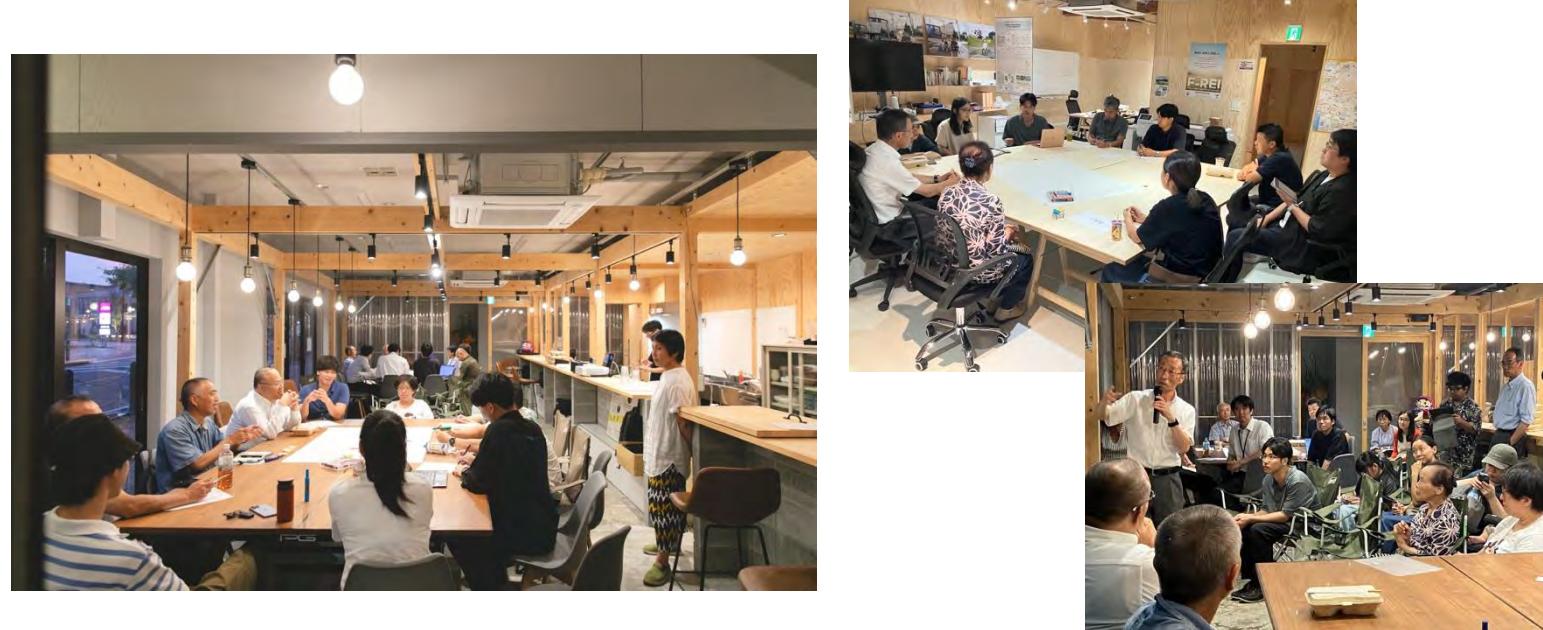


同じくFUTAHOMEに勤務
する東北大学の苅谷先生と

Formalな交流の場として： FUTAHOMEにて住民同士の対話の場、お互いの活動を知る場として月一交流会を開催。 HOMEあう会

目的：

- 原発避難12市町村の地域資源、現在・これまでの取組、人材などに関して良いところを再発見・再確認する場（互いに褒め合う）。
- 再発見・再確認のやり取りを通して、参加者（行政、住民、事業者、まちづくり支援団体等）同士の人的ネットワークを広げ、新たな取組の創出や既存の取組の連携等が生まれるきっかけとする。



<ゴール>

垣根を越えた人ととの関係づくり、ひいては今後のまちづくりに向けたチームづくりにつなげていくこと

<グランドルール>

- ①相手を思いやる（どんな意見も否定せず、相手へのリスペクトを忘れず、みんなが話せる機会をつくる）
- ②垣根を越える（所属する組織や立場は超えてフラットに）

第1回 ポットラック
**FUTABAを
HOMEあう会**

新しくできた地域活動拠点「FUTAHOME」で、双葉町の昔と今、そして未来について言い合う会です。今回は「北双葉」をテーマに、昔あつたこんな行事、これからこんなことやってみたらなどについて、ざっくばらん語り合いませんか？

日 時：4月25日(金) 18:00～
(20:00終了予定/途中参加・退出OK)

場 所：FUTAHOME 1階
(双葉町大字長塚字45-1)

内 容：ゲストトーク、フリートーク
(結婚・恋愛・双葉・大熊)「昔あつたこんなこと、今やっているこんな取組、こんなことできたらいいなど）

参加費：無料

FUTAHOMEカフェで食事、ドリンクを販売します
持ち込みOKです！

参 加 の 申 は こ ち か か ら

**HOMEあう会 第2回
北双葉で
考える**

新しくできた地域活動拠点「FUTAHOME」で、浜通り地域の昔と今、そして未来について言い合う会です。今回は「北双葉」をテーマに、昔あつたこんな行事、これからこんなことやってみたらなどについて、ざっくばらん語り合いませんか？

日 時：5月28日(水) 18:00～
(20:00終了予定/途中参加・退出OK)

場 所：FUTAHOME 1階
(双葉町大字長塚字45-1)

内 容：ゲストトーク、フリートーク
(結婚・恋愛・双葉・大熊)「昔あつたこんなこと、今やっているこんな取組、こんなことできたらいいなど）

参加費：無料

FUTAHOMEカフェで食事、飲み物販売します。牛丼南煎丼弁当(1,200円)を希望の方物5/24までにお申込みの際にご予約ください。

参 加 の 申 は こ ち か か ら

**HOMEあう会 第3回
双葉郡で
つながる**

新しくできた地域活動拠点「FUTAHOME」で、浜通り地域の昔と今、そして未来について言い合う会です。今回は「双葉郡」をテーマに、主に双葉町でこれまで取り組んできたこと、これからのことなどについて、ゲストスピーカーを交えて語り合います！

日 時：6月19日(木) 18:00～
(20:00終了予定/途中参加・退出OK)

場 所：FUTAHOME 1階
(双葉町大字長塚字45-1)

内 容：ゲストトーク、フリートーク
(双葉郡での思い出、これまでの取組、これからやっていること、必要なことなど)

参加費：無料

ritaによるお食事・飲み物販売します。牛丼南煎丼弁当(1,200円)を希望の方物5/24までにお申込みの際にご予約ください。

参 加 の 申 は こ ち か か ら

**HOMEあう会 第4回
FUTABAを
HOMEあう②**

新しくできた地域活動拠点「FUTAHOME」で、浜通り地域の昔と今、そして未来について言い合う会です。今回は第3回に引き続ぎ「双葉郡」をテーマに、主に双葉町でこれまで取り組んできたこと、これからのことなどについて、ゲストスピーカーを交えて語り合います！

日 時：7月23日(水) 18:00～
(20:00終了予定/途中参加・退出OK)

場 所：FUTAHOME 1階
(双葉町大字長塚字45-1)

内 容：双葉町民による活動紹介、健康で楽しい暮らしに向けての話し合い

参加費：無料

ritaによるお食事・飲み物販売します。牛丼をご希望の方は7/20までにお申込みの際にご予約ください。

参 加 の 申 は こ ち か か ら

**HOMEあう会 第5回
学生と双葉に
種をまく**

新しくできた地域活動拠点「FUTAHOME」で、浜通り地域の昔と今、そして未来について言い合う会です。今回は「学生と双葉に種をまく」をテーマに、主に双葉町でこれまで取り組んできたこと、これからのことなどについて、ゲストスピーカーを交えて語り合います！

日 時：9月16日(火) 18:00～
(20:00終了予定/途中参加・退出OK)

場 所：FUTAHOME 1階
(双葉町大字長塚字45-1)

内 容：高校生・大学生によるインター活動報告会、双葉町での今後の展開等についてトーク

参加費：無料

ritaによるお食事・飲み物販売します。牛丼をご希望の方は7/20までにお申込みの際にご予約ください。

参 加 の 申 は こ ち か か ら

12

Informalな交流の場として： 「Tomo's bar 月曜から夜ふたば」

@FUTAHOME 1Fにて毎週月曜夜開店

9月 店舗ラインナップ	
SUN	 FUTAHOME cafe LUNCH 11:30-14:00 CAFE 14:00-17:00
MON	 じょーじの はっぴーきっちん LUNCH 11:00-13:00
TUE	 募集中！
WED	 粹家 LUNCH 11:30-14:00
THU	 FUTAHOME cafe LUNCH 11:00-14:00 CAFE 14:00-17:00 DINNER/BAR 17:00-21:00
FRI	 FUTAHOME cafe LUNCH 11:30-14:00 CAFE 14:00-17:00
SAT	 FUTAHOME cafe LUNCH 11:30-14:00 CAFE 14:00-17:00
FUTAHOME	

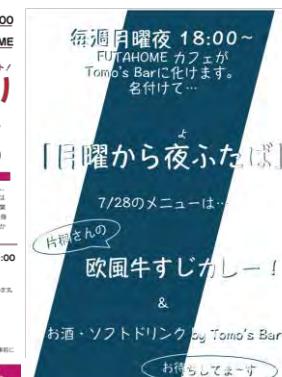
FUTAHOMEインスタグラムより

コンセプト：

1日の終わりに、ふと立ち寄って一息つける場所があるといいな、という思いから始まったTomo's bar。なんとなく人が集まって社交できる場、そんなサードプレイスがたくさんある地域には民主主義が育ちやすいらしい。フタホメ2Fにいる2人のTomoによる企画「月曜から夜（よ）ふたば」は、時には静かに飲み語り合う場、またある時はユニークな仲間たちによる一夜限りの食堂、カフェ、バーからDJナイトまでなんでもあり。

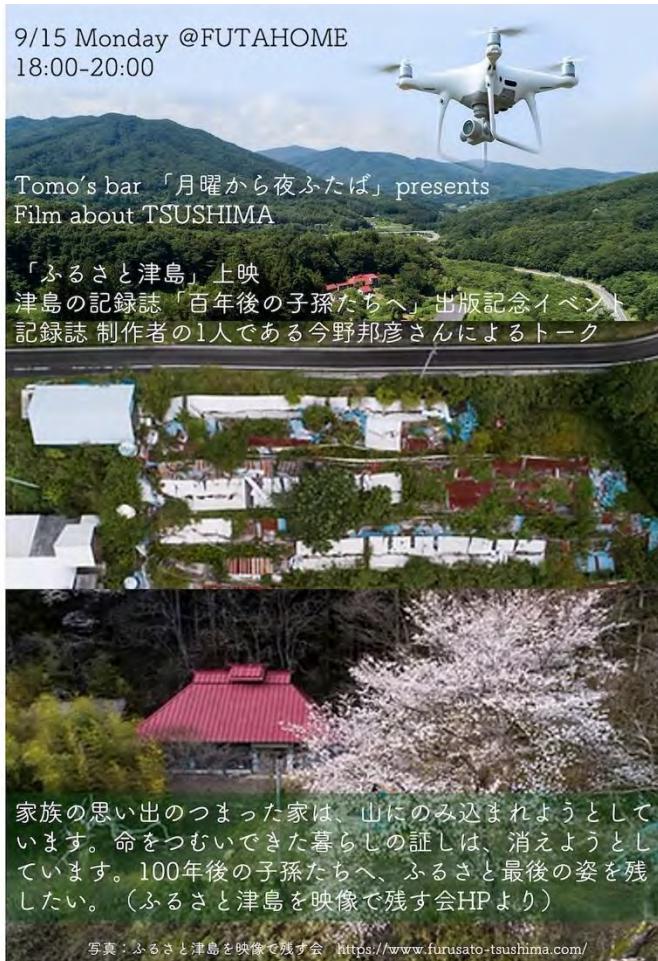


仙台アトリエサタチの子供達と遊びました



「Tomo's bar 月曜から夜ふたば」での取り組み：

9/15 「ふるさと津島」上映会＆「百年後の子孫たちへ」出版記念イベント
立教大学関礼子先生、今野邦彦さん、ふるさと津島を映像で残す会、今野秀則さん、多くの方々
のご協力のもとで実現しました。カンパは津島原告団に寄付させていただきました。

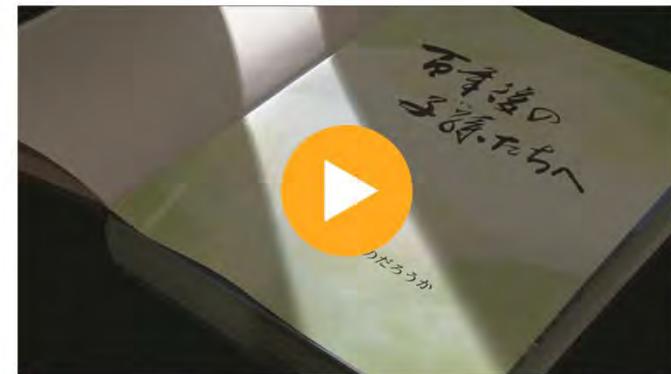


写真：ふるさと津島を映像で残す会 <https://www.furusato-tsushima.com/>

TBS NEWS DIG Powered by JNN

ニュース 深掘りDIG 深掘り特集 LIVE・動画 配信中 天気防災 地域
新着 国内 国際 コロナ 経済 暮らし・マネー 話題・グルメ エンタメ スポーツ

「888ページ、全体が怒り」故郷の宮み記した帰還困難区域の
記録誌 福島



2025/10/7 TUFテレビ福島にて放送
「888ページ、全体が怒り」故郷の宮み記した帰還困難区域の記録誌 福島



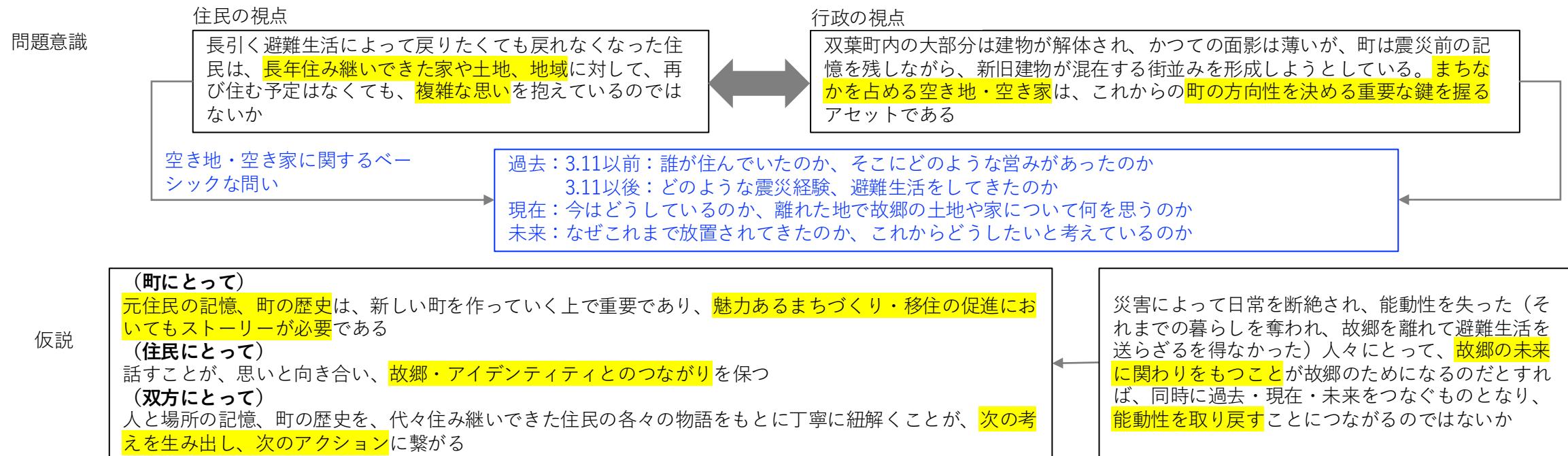
「ふるさと津島」の上映会



編集者の1人今野邦彦氏による「100年後の子孫たちへ」制作についてのトーク

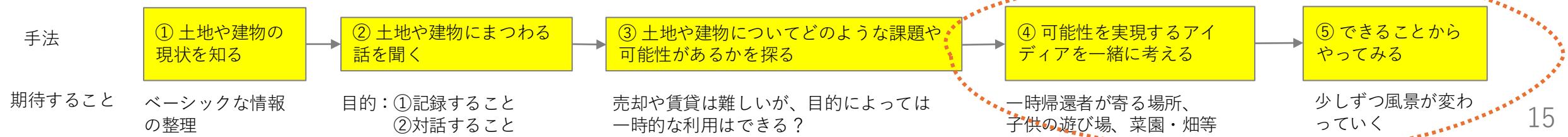
1) 研究の背景・問題意識、仮説

帰還者数・移住者数の伸び悩みの要因には居住に必要な住宅・生活に必要なサービスや施設の不足があるという問題意識から、人々が住みたくなる、戻りたくなる町のイメージを提示するため「双葉駅東地区まちづくり基本構想」が策定された。その実現＝事業の可能性検討のため、双葉町はこれから「双葉駅東地区まちづくり基本構想に係る土地活用意向調査」(6/20調査票配布開始)を実施する。



2) 調査の手法、期待する効果

将来の土地活用意向を確認するだけでなく、土地や建物にまつわる地主や所有者のストーリーを聞き取り、明らかにする。この聞く・話すという対話プロセス自体が対象者にとって重要だと考え「ナラティブ・アプローチ」を用いる。その目的は①人と場所の歴史を記録すること、②この調査を通じて、対象となる住民に働きかけ、町や場所、人々とのつながりの回復の一助とすることである。



展示会で使用された木材をリサイクル！

東京の展示会で使用された木材一式を主催者の公益財団法人日本デザイン振興会から被災地での復興まちづくりに役立てるということで寄贈していただいた。

5/19、1坪サイズのブース8個2セット分と展示パネル材等2tトラック2台分が届きFUTAHOME2階倉庫に保管。



GOOD DESIGN Marunouchi企画展「山と木と東京TOKYO WOOD LIVING 2040」丸ビル木イチ(2025/5/16-18)のディレクター(内海彩・長谷川龍友建築設計事務所 内海彩氏)のご厚意により実現しました



設置場所の検討開始

- 復興まちづくりに役立てるための利活用方法を検討するために双葉町役場に打診した(5/20)
- 双葉町住民Aさん（3児の母）と立ち話中に「双葉町には子供の遊び場がない」という話を聞く。
- 置き場所が確保できるなら、この材料で遊具を作って子供の遊び場を作れるかもしれない、という話から、Aさんが自宅建設のために購入した土地を、家が建つまでの間、子供の遊び場として使っていいと言ってくださいました。



Aさんの敷地

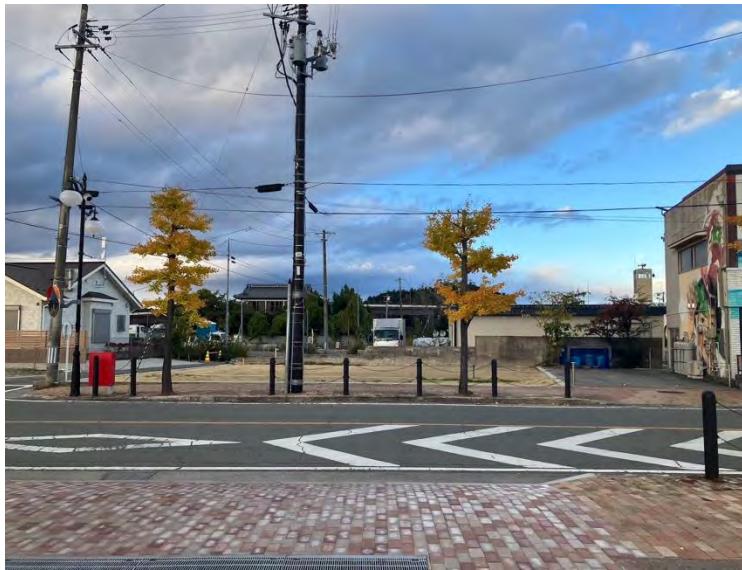
公費解体が進み、空き地が多い双葉町。人口200人未満だが子供は15人。学校帰りの子供たちが遊べる公園がない。遊具もない。じゃあみんなで作ろう！材料と場所は確保できた。お金はない。とりあえず話し合うことから始めた。

住民とのミーティング

震災前の双葉町の公園はどうだったのか、今の子供の遊び場事情、欲しい遊具のイメージ、安全確保や管理、責任問題、プレーパークのような仕組みの必要性など様々なことを議論し始めた。

新しい土地出現！

住民との話し合いを重ねるうちに時間が経ち、FUTAHOMEの横の家が解体されて空き地ができた。土地主に相談してみたら「借り手買い手がつくまでなら使っていいよ」と言ってもらえたのでこの土地で子供から大人まで使える広場づくりの検討をすることになった。



住民、関係者へのプレゼンとブレスト会議

東北大学生等による提案に対してデザインや使い方等について様々な意見が出された(12/22)。広場化をする上で共同運営主体の形成の必要性についても議論された。2月か3月にDIYで作成する。



地域の交流スペースとして 共同運営を始めた古民家 「みんなのこーみんか」

避難指示解除から10年、「木戸の交民家」スタートからから9年経ち、町の状況も変化した。そんななかで地域に必要とされている場とは何か?を改めて問い合わせたい。

「木戸の交民家」が作りあげてきた「交流の地点」という有意義な活動を継承しつつ、「ゆるやかな循環」をテーマに新たな活動も取り入れて拠点化の再スタートをきるための第一歩となるセミナーとワークショップを実施する。

対象建物（旧「木戸の交民家」）について

- 常磐線木戸駅から徒歩7分、庭付き築70年の木造平屋住宅(延床約53坪,敷地約200坪)
- 震災前から空き家だったが、2016年、移住者らが中心となり一部改修し「木戸の交民家」が誕生。当初の目的は、震災後、地域に現れた「新しい居住と労働」のあり方に対して、「顔の見える関係性」を繋ぐ必要性を感じたからだった
- 学生や住民の交流の場として利用されてきたが、コロナにより利用率が低下。
- 現在は月に1~2回の民泊利用、部屋レンタルのみ。



「木戸の古民家再生プロジェクト ふくしま復興塾第3期生 緑川英樹 古谷かおり」より抜粋

- ◎これまで「木戸の交民家」で取り組まれてきたこと
- 学生の学びと交流の場
 - 地域住民と移住者の交流の場
 - 宿泊施設（学生の合宿、民泊）

◎新体制で新たに取り組みたいこと

- 地域の伝統文化継承の場：イベントの企画
- 他団体との連携拠点：ふくしま浜街道トレイルの中継点等
- リサーチ活動：空き家・空き地利活用促進のための調査等
- 情報交換の場：地域資源の循環に関する情報交換の機能整備
- 防災拠点・災害時シェルター：平時有事の場づくり

民泊兼交流スペース みんなのこーみんか をはじめます！

この度、山田岡地区にある古民家の民泊兼交流スペース「木戸の交民家」を引き継いで、「みんなのこーみんか」として運営していくことになりました。「みんなのこーみんか」という名の通り、年代、性別、背景にかかわらず、みんなが使いやすい場になることを目指しています。みなさんのご意見も伺いつつ、良い場を作りたいと思いますので、お力添え、どうぞよろしくお願ひいたします！




みんなのこーみんかでできること

場所のレンタル：お食事会、集まり、イベント、練習などの会場にぜひ。
イベントへ参加：定期的にイベントや勉強会などを開催する予定です。
宿泊場所として：民泊もやっております。
レンタル：1h/1000円、宿泊：1泊素泊まり/4500円

場所：楢葉町山田岡字駅内2

お問い合わせは
みんなのこーみんか
事務局まで→

住所：〒979-0513 楢葉町山田岡字駅内2
電話：080-4717-2370 (平日10:00-17:00)
メール：naraha.circle@gmail.com




デザイン：森山晴香

「木戸の交民家」の来歴と 引き継いだ経緯

2016年
多くの被災家屋が解体されていた状況の中、木戸の築70年の古民家で当時の移住者や若者が中心となり、古民家再生プロジェクトがスタート。「木戸の交民家」として、この地域で暮らす方、働く方、支援者として関わる方々を含めた、地域コミュニティの交流の拠点を作る取り組みが進められました。そして多くの方々のご協力のもと、DIYで家のリノベーションも行われました。

2017年～
交民家周辺の田畠の運用がスタート。田植えや稲刈り、お米を食べる会、作ったお米を活用したクラフトビール作りなど、交民家を拠点に活動が行われました。ライブ会場としての活用、民泊登録など、新たな展開も多々ありました。

2019年～
コロナのため、活動が縮小。

2025年10月
前の借主の方を手を引かれるということで、「木戸の交民家」に縁があった3人（松下、森山、宇佐見）が、大家さんや前借主との話し合いの末、引き継ぐことになり、「みんなのこーみんか」として再スタートを切ることになりました。

今後の活動について
今後は民泊の運営と共に、町に住む方々、外から訪れる方々がふらっと遊びに来れるような、居心地の良い場にしてみたいと思っています。定期的にイベントや、マルシェ、勉強会などを企画していくので、ぜひ足をお運びいただけますと嬉しいです。こーみんかを使って「こういうイベントを企画したい」などのお誘いや「こういうイベントをやって欲しい」といった要望もお待ちしております！

みんなのこーみんか事務局：松下、森山、宇佐見



「みんなのこーみんか」の運営を始める森山さん、宇佐見さん、松下さん。スタートの経緯などを森山さんに伺いました。

だれもがこのまちをつくる主人公！
ならはのプレイヤーたちをご紹介

「みんなのこーみんか」運営
宇佐見 采花さん 松下 朋子さん

お話を伺った 森山 晴香さん

是非足をお運びください！

たこでした。「大切に使われてきたものが、気づかないうちに消えていく」手遅れになる前に何かができるのではないかと、仲間と考え続けてきました。

「みんなのこーみんか」では、地域の空き家を通して、この地域で培われてきた文化をこれから時代にどう継いでいくのか、手放したい人から、必要とする人のために、どう繋いでいくのか、「みんな」で考え、話し合うことができる場所にしていきたいと話します。そして、そのような試みを通して様々な世代や背景の方が混じり合う場になればと願っています。

土地やモールに残る記憶や想いを次につないでいくの大切さを、あらためて感じる機会になりました。「みんなのこーみんか」を拠点に、人と人のつながりが深まり、現在の活動へつながっています。

現在の活動の大きなきっかけになったのは、地域に残されていた古い道具やもののが、整理の過程で処分されてしまっています。

この活動は、ふるさと納税寄付金を活用した楢葉町の町民提案型まちづくり補助金を活用しています

福島民報 2026年1月13日 (火)

福島のニュース	国内外ニュース	スポーツ	特集・連載	あぶくま抄・論説	気象・防災
試読紙のお申込み(無料)	主催事業	出版ガイド	会社案内		

主要

楢葉で学ぼう古民家再生 循環型社会実現へ 補修や清掃技術体験 大工指導 次回ワークショップは18日

2026/01/13 10:35



1軒の古民家再生を通じて、空き家の補修や清掃の技術を学ぶ取り組みが福島県楢葉町で始まった。家主や大工、専門家を招き、町民らと再生の方法を学ぶワークショップを2月まで実施している。空き家活用の機運を地域に波及させて、循環型社会の実現と地域活性化へつなげていく。



掃除の方法を学ぶワークショップに取り組む参加者。森山さん(右から2人目)、



空き家・空き地等の活用を通じた
地域拠点づくり・古民家再生・拠
点化を通じたヒトモノ循環PJ
楢葉町まちづくり補助金の助成を
受けてワークショップを開始

楢葉町を中心に、空き家や空き地、もの、地
域や人の循環について模索する場をつくる
いくことを目的とし、様々な背景を持つ方が
居心地良く利用することのできる場づくりを
皆で考えたい。

【WS #1 家主さんの思いを聞く会】
家を借りること・手放すことについて考える（参加費：1000円）

【WS #2 建物健康診断セミナー】
古い家屋を守っていくことについて考える（参加費：1000円）

【WS #3 お掃除ワークショップ】
お片付けを通してその家の歴史について考える（参加費：無料）

【WS #4 これまでの過程の展示】
これまで考えたことを振り返る

【WS #5 振り返り会】
『みんなのこーみんか』について考える（参加費：500円）

information

TEL: 0797-5013 楢葉町山田岡駅内2
TEL: 080-4717-2370 (平日 10:00~17:00)
Email: naraha.circle@gmail.com
Email: @naraha.circle

申込フォーム

申し込み欄

参加希望日程

ご希望の日程に○をつけてください

12/20 12/21 1/18 1/24 2/7

参加者氏名

申し込み欄

連絡先

※メール・電話、もしくは申し込み用QRコードよりお申込みください。
または、右の「申込用紙」に記入と電話番号、参加希望日をご記入の上、
「こーみんか会員」として登録ください。
(特典: 各WS前日 / 当日: 飲食)

* 内容は変更になる場合がございます。

デザイン: mamagoto architects

●WS #1 家主さんの思い
を聞く会
日時：12月6日（土）
概要：家主さんの心境、貸
す時のハードルなど、空き
家を持つ家主さん目線の話
を聞き、意見交換する



●WS # 2 建物健康診断セミ
ナー
日時：12月20日（土）
岩田先生、伊藤さん（双葉
の古民家再生）、浪江の渡
部さんのお話を聞いてみんな
で意見交換



●WS # 3 お掃除
ワークショップ
日時：12月21日
(日)

写真：中島 悠二

「循環についてゆるやかに考える会」の活動：教えて！「暮れ市」まちあるき企画

教えて！「暮れ市」まち歩き 企画書

1. 企画概要

タイトル	教えて！「暮れ市」まち歩き 2025
日時	2025年12月26日(金) 10:00~15:00
場所	<開催エリア> 旧木戸宿の通り沿い (kashiwaya~薬師堂) <メイン会場> シェアハウスと食堂kashiwaya (食堂部分と駐車場) 〒979-0514福島県双葉郡楢葉町下小塙町116-1
駐車場	kashiwaya正面の空き地 (下小塙字片町4)
運営	循環についてゆるやかに考える会 (松下・森山・宇佐見)
担当者	氏名 宇佐見 采花 (うさみ あやか) 連絡先 090-5182-5178 メール usamiboar2@gmail.com

2. 企画詳細

背景・趣旨	楢葉町には、昭和30年代あたりまで楢葉町木戸宿の通りや童田で「暮れ市」が行われていた記録が残っています。2024年に有志のメンバーで暮れ市についてリサーチを始め、当時を知る方にお話を聞いたり、古地図を頼りに町を歩いたりしました。まだ当時の全貌はつかめていないですが、私たちなりに解釈した「暮れ市」を開催したいとなり、初開催にいたしました。そして、今年も「今やるとしたら、どんな暮れ市がいいのだろう」ということを考えながら、地域の方と協力して暮れ市を開催したいと考えています。
具体的な企画内容	

① 暮れ市についてお話を聞く

昨年度に引き続き、kashiwayaの食堂や駐車場をお借りして、暮れ市に関する思い出をお伺いしたいと考えています。同時に昭和30年代で暮れ市が幕を閉じたのか、今暮れ市をやるとしたらどんな形が良いのか想いを巡らせる時間になればと思います。



昨年の様子：kashiwayaの食堂でお話を聞く

企画書作成：宇佐見采花

② まち歩きスタンプラリー

大正～昭和30年代の木戸宿の写真を楢葉町からお借りし、空き地に展示。まち歩きをしながら当時の暮らしに想いを馳せ、ポイントに設置されたスタンプを探してスタンプラリーを楽しんでもらいます。



昨年の様子：スタンプラリー

③ ぐるぐるフリマ

昔の暮れ市を知りたいと思うのと同時に、ただ昔の暮れ市を再現するのは少し違うな、と感じています。なぜ楢葉の暮れ市が昭和30年代で幕を閉じたのか、2024年からのリサーチで明確な答えは出ていませんが、「暮れ市に行かなくても、普段からなんでも手に入る便利な世の中になったからかな？」とお話してくれた方がいました。世の中の人が増えて、暮れ市が無くなったのだとしたら、何かそのことを考える売買の仕組みなども模索できたら面白いかとも、と思いました。そこで、暮れ市では、人が簡単に買える世の中でも、もう少し人との、人と人の関係や触れ合いを介したやりとりを経験してみたいという話から、「ぐるぐるフリマ」を開催することにしました。



昨年の様子：kashiwayaの食堂での写真展示

ぐるぐるフリマは主に「交換」で成り立つフリマです。

- ① ものとの交換
- ② 想い出・お話交換
- ③ 芋orりんご交換 (変更になる可能性があります。)

屋台を構えている人のところへ行き、欲しいものがあれば①、②いずれかの方法で交換を交渉することができます。ものを持ってきていない、話をするのは苦手、という方向けに、現金を芋orりんごに交換できる換金所があります。そこで交換をしてからお買い物を楽しんでいただきます。出店者は、交換で良いものと現金で購入してほしいものを分けることができ、③で交換されたものは最終的に現金に換金することができます。



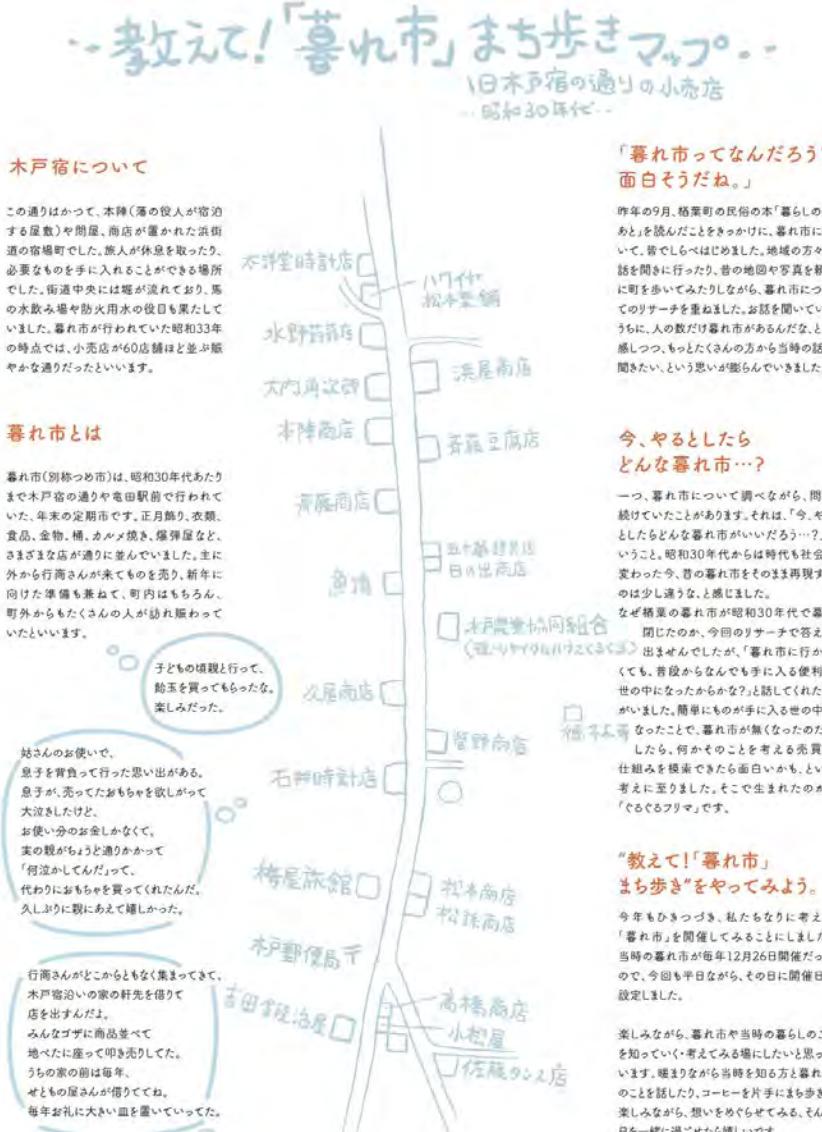
昨年の様子：木戸宿沿いの空き地で出店

また、新しい取り組みとして地域にお住まいの皆さんに呼びかけをして、「ご自由にどうぞBOX」を玄関先設置してもらいたいと考えています。まち歩きをしながら、BOXを覗き思ひ出会いを楽しむことができます。「自宅の不用品が誰かの必要なものとなる」という楽しさを地域に広げ、暮れ市だけではなく、日常的にものや想いがぐるぐる循環する文化をつくっていけたらと考えています。

「教えて！暮れ市」を昨年に引き続き「循環についてゆるやかに考える会」と木戸宿住民、下小塙行政区の皆さんと一緒に実施しました



「循環についてゆるやかに考える会」の活動：教えて！「暮れ市」まちあるき企画



活動から見えてきたこと

- 外からではわかりにくかった被災地域の様々な事情が少しづつわかって
きた（暗黙知の獲得）
- 活動を通じて、交わらない人たちが交わり、立場の異なる人たちとの会
話が増え、交流が増えたが、まだ人として知りはじめた程度（関係性の
構築）
- 小さな可能性や意思を見つけて、とりあえず動かしてみたら少しづつ前
に進みはじめ、やりながらいろんなことがわかつってきた（アクションリ
サーチ）

被災地域だからこそ・・？

日々変わる風景、見える景色に、何が起きているのか考えさせられる

ネガティブなことばかりでなく、被災地域だからこそできることがあり、
出会える素晴らしい人たちが沢山いることに気がついた



ご清聴ありがとうございました。
EUTAHOME ごうちのエコカラットに待ちとておまか